

佐藤岳詩

『R. M. ヘアの道德哲学』

(勁草書房 2012年 v+276+viii 頁)

江口 聡

本書は R.M. ヘアの著作を通時的に見直すことによって解釈し、彼の理論を、狭い意味の「道德」を超えて個人の「生き方」の選択、すなわち「我々はいかに生きるべきか」という問いへの回答として捉えようという野心的な試みを提示したものである。

佐藤によればヘアはメタ倫理学上の非認知主義者ではなく、また規範倫理学において結果主義者でもない。それどころか、彼の選好功利主義は倫理的に中立であって規範倫理学理論でさえない。選好功利主義は、狭い意味での人々の間の利害の葛藤の調整や社会道德にのみかかわるものではなく、個人の「生き方」の選択に関するものでもある。こうした「常識破り」のヘア解釈に対しては、すでに伊勢田哲治が『倫理学研究』第43号の書評で手厳しい書評を行っている。伊勢田の主な批判は、(1) ヘアの立場の変遷・発展に対する無配慮、(2) 独自の解釈に対するヘアのテキストの裏付けの不足、特に普遍性と一般性の区別の誤解、(3) 通常とは違った独自の意味での倫理学用語の使用等に関するものであって、私自身もこうした方法論と記述に対する批判の大部分については同意するものである。しかしながら、ヘアの理論を「道德的な生とは自ら選び取るものである」(p.215) とする著者の斬新な解釈の試みには魅力があるため、手短かに検討しておきたい。

ヘアによれば、ある判断が道德的であるとは、その判断が普遍的な指令でありかつ優越的のものである場合である。佐藤の解釈では、いかなる価値判断もそれが優越的に扱われるなら、つまり行動に結びつく形で優先されるならば「道德判断」である。ヘアが『道德的に考えること』(MT) でたどりついた理想的な道德思考、つまり批判的道德思考においては、こうした道德語を用いた判断の性質から、我々は道德判断を下す際に、それに関係する人々の選好すべてを自分自身のなかに十分に再現した上でその判断を受けいれることができなければならない。そのためこうした理想的な道德思考は、結果的に選好功利主義的な思考と同じ結論を支持することになる。しかし佐藤によればこうしたヘアの理論は、道德の「べし」ではなく熟慮の「べし」にかかわるものであって、それゆえ我々はヘアの理論を踏まえた上でそれぞれ自分の価値観にもとづいて道德的に自由に生きることができるのだという (p.247)。

佐藤は、こうした決断主義的な傾向を解釈に持ちこんでしまうことで、ヘア自身の立場とはまったく違ったものをヘアのものとしてしまう。罪のない20人が殺される場面で、自分の手でそのうちの1人を撃ち殺せば残りの19人を助けてやると提案されたジムについての議論を見てみよう。ヘア自身の見解は、こ

の事例について、もしジムも他の人々も批判的な思考を行うならば、ジムは最大の嫌悪を感じながら1人を撃つべきだという結論に達するだろうというものである (p.210)。

しかし佐藤によれば、批判的思考の出発点は、道徳的思考を行う人の選好、あるいは佐藤の別の表現を使えば「生きる意志」であり、ジムにとって銃を取るという選択肢はそのそもそもの出発点である選好を否定することになる。佐藤は「私の生への意志を崩壊させるような判断は私のそもそもの動機に鑑みて、必然的に受け入れ不可能」であるという (p.213)。自分のアイデンティティや全一性にかかわる選好は生にとって根本的なものであって、我々はそれに反するものはそもそも優先的・指令的という意味での「道徳的」判断として受け入れることができない。そしてこれはヘアの普遍的指令主義と整合的な見解であるという (p.214)。

ヘアの二層理論の標準的な解釈をふまえれば、もちろんこうした異常な事態において、ジムが理想的な批判的思考に従えないのは限界のある人間として当然のことであるし、またプレッシャーや時間不足、自分の判断能力の限界ををふまえて、あえて批判的思考を行うことを控え、自分の道徳的直観に従うことも十分支持される考え方である (MT 10.3)。また、現実世界ではありそうのないことだが、自分の道徳的全一性の維持に対するジムの選好が、他の19人の生きたいという選好を合算したものを上まわるほど奇想天外に強いと仮定するならば、その場合はジムの批判的思考と選好功利主義の判断は一致するだろう (MT 10.6)。しかし、

もしジムが十分冷静で、十分な情報を知った上で批判的思考を行おうとしながら、「いかなる場合も無実の人を自分の手にかけるべきではない」という自分自身の道徳的信念を、他の選好との比較を許さないほど優先的なものとして扱って、助かるかもしれない19人の生き続けたいという強い選好をあえて考慮に入れず、あるいは軽視するのであるならば、これは自分の道徳的信念や理想を他人の利害や選好よりも優先してしまう「狂信者」の態度に他ならない。少なくとも見かけの上では、佐藤の解釈はMT以降のヘア自身とはまったく相いれないものであるように思われる。

たしかに佐藤のヘア解釈には、ケルケゴールやサルトルらの流れにつながる「意味ある生」を重視する実存主義・決断主義的な魅力があり、ヘアをそうした関心から読むことは不可能ではないだろう。しかしヘアの哲学はそうした決断主義を越えて、まずは人々の利害や選好が葛藤する場合に、道徳的な「べし」の論理を踏まえつつ事実を見ずえるかぎり、完全な無道徳主義者を除く誰もが同じようにたどりつく合理的な結論がありうるということを示すことであったはずである。

こうした大きな難点はあるものの、本書は野心的な若手研究者による真摯な研究書であり、道徳哲学者としてのはっきりした立場表明であって、本書での主張や関心の傾向を見るに、応用倫理学や人生の意味の問題といった直接に我々の「生き方」の実質に関わる問題群の方向に研究の歩を進めて行くと思われる。研究の進展を期待するものである。

(えぐち さとし・京都女子大学)